八王子市学童での読書と地域連携

川真田　恭子 *

Children's reading activities and local cooperations at an afterschool care center in Hachioji

Kyoko KAWAMATA

2014年4月から八王子市にある元八王子東小学童保育所（以後、元八王子東学童と記入する）に非常勤で勤務した。時代の流れの親の要求なのであろうか、サッカー、水泳やピアノのお稽古事などに送り出し、その子がまた学童に戻ってくる。そのような多様なニーズに応えるために、帰宅時間も千差万別そして一人がえりとお迎えに分かれて、その対応に追われる職員の仕事である。この変化が社会に認知されているのであろうかと考える。厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課の「ひとり親家庭等の支援について」（平成27年1月）の「平成23年全国母子世帯等調査の概要」によると、世帯数（推計値）母子世帯は123.8万世帯、父子世帯は22.3万世帯である。圧倒的に母子家庭が多い。ひとり親世帯になった理由は、母が離婚80.8%、死別7.5%、父は離婚74.3%、死別16.8%である。昭和37年（1962年）から離婚率が上昇してきているのである。就労母子家庭のうち正規の職員・従業員は39%、パート・アルバイト等は47%、就労父子家庭のうち正規の職員・従業員は67%、パート・アルバイトは8%である。平均年間収入（母または父自身の収入）の母223万円、父380万円である。この数字から母子家庭の生活の不安定と経済な困難な状況が浮かび上がる。この日本の状況が、働く親の支援である学童にも影響を与えるのである。

読書について、大学講義の中でアンデルセンの『マッチ売りの少女』を知らない学生が16人中16人であったことに、活字離れという言葉が現実の問題となり身近に感じた。優秀なT君の読書の意義を書いた文章を引用する。「考える力を育てる。読むときには様々なことを考える。登場人物の心情、関係性を考え、ストーリーをつなげて考えたり、読み返して新しい発見をする。その過程で考える力が育つ。また、登場人物の人情や行動について考えても答えのないことも多い。そこから自分の答えを作り出すことは、自分の考えを持ち自我を目覚めさせることや、社会に出て答えのない問題にあったときに、自分で答えを作り出す力を生む。その他には、心を育てることがあげられる。人の一生に体験できないことを本の中に見出すことで、夢を持ち、喜怒哀楽など、様々な感情が生まれる。それは心の宝になると、私は思う。」読書が意義深いことを適格に記入して

＊大東文化大学文学部教育学科非常勤講師

くれた。言語能力を身に付けさせ想像力・創造力・思考力・情緒を育むとT君の経験で語っている。また、T君のように表現力もつく。このような力をつけるには、乳幼児期・小学生の時期が重要である。仕事をしている親にとっては、学童という教育の場や生活の場でもある子どもたちが過ごす時間は、放課後4時間から7時間、土曜日は1日保育となる。家庭での睡眠時間・学校での生活を除くと学童の時間は長く貴重な時間である。言語を育む実践を学童での生活を通して考えていきたい。

東京都の西にある八王子市は、高尾山と大学が多い街として知られている。八王子市の北に位置する元八王子東学童所は、八王子市立元八王子東小学校(平田英一郎　校長)の敷地の中にある。

I　学童生活

「ただいま」と、学童児が来る。「おかえり」と、指導員が迎える。学童という場は、学校でもなく家庭でもない、しかし学校のようであり家庭のようでもある。そこには、学童文化生活がある。元八王子東学童の施設は、元八王子東小学校の1階西側奥にある。廊下を隔てた目の前は給食室になっている。学童の保健室はない。学校の中にあるため安全については、安心がある。学童児は74人、職員は常勤が2人、非常勤が5人である。

登所後、学童児は宿題をする。担当の指導員に宿題を終えた子どもは持参して、宿題チェックリストに印をつけてもらう。指導員は宿題をしている子どもの間の中に入り、勉強がわからない子どもに教える。1年生で手の指を使って足し算や引き算をしていた子どもは、二桁になるとつまずく子が多い。やり方を教えると、「わたしにも」「ぼくにも」という声が聞こえてくる。時計の計算や文章問題や掛け算など、学童で教える意義はあるが、一人か二人の担当指導員は多忙である。3年生になると一目で正否がわかるような問題ではなく、こちらもう～～んと時間が必要になる。宿題をしないで、すぐ遊ぶ子は親から「学童で宿題をさせてください」という言葉をもらう。仕事をする親の家庭での多忙さを思うと、学校教育支援の学童の存在は決して小さくない。朗読の宿題は家庭ですることになっている。

年間行事

1月　お正月工作・入所申込み・学童についてのアンケート
2月　豆まき・お化け屋敷（児童館）・親子ドッジボール大会・保護者会・避難訓練
3月　ひな祭り・お別れ遠足・卒所祝い・入所説明会
4月　入所・進級をお祝いする会・交通安全教室
5月　手作り昼食・保護者個人面談

6 月　手作り昼食
7 月　手作り昼食
8 月　キャンプ・買い物お昼
9 月　ドッジボール大会・避難訓練
10 月　高尾登山、ハロウィン
11 月　ミニサッカー大会・勤労感謝工作
12 月　クリスマス会・手作り昼食・買い物お昼・保護者会
毎月する行事
お誕生会、キッズカフェ、おはなし会、将棋教室（月２回）、編み物教室（月１回）

Ⅱ　連携についての考察

①学童児同士の繋がり
・学童は１年生から３年生まで生活するところで、学年を超えたコミュニケーションが自然に生まれる。今、独楽が流行っているが、学年を超えて、やり方を教え合って技術が向上していく姿を見る。上手になった子は独楽を投げる手つきから違ってくる。１年生が先輩の上手な人のやり方を見て真似する。迎えに来た父親が、子どもたちの前で独楽まわしを披露する。
・育成室に子ども用の机が 10 あり、そこに７～８人の子どもが１年生から３年生までが混ざってグループで座る。おやつのときは、お互いにしゃべり合いながら食べている。
②保護者との繋がり
・高尾登山は学童に残る職員が必要であったため、職員だけでは不安があった。この支援に、保護者・職員の家族が参加応援をしてくれ、学童児の安全確保に貴重な応援であった。キャンプには私は学童に残った職員であったが、物資運搬で保護者が車で協力してくれた人がいた。学童の運営に保護者の理解と協力が欠かせない。
・一年生に、韓国人、中国人、父親が日本人・母親がフィリピン人の子どもがいる。父親が日本人で母親がフィリピン人の子ども A さんは、今まで集団生活をしたことがなく学童に入所した。今では学童の生活に慣れたようである。母親は英語も日本語も日常会話は難しい。A さんは、じゃんけんで後出しをする。子どもたちから「ずるいずるい」と訴えてくる。私とじゃんけんをしてみても、後出しが変わらない。たいていは母親が迎えに来るが父親が迎えに来た時に、後出しの話をして、「子どもたちにとって、じゃんけんは決定するときに使うので大切なのです。家で練習してもらえないか」と話をした。父親は「すみません」と深々と頭を下げた。その後、A さんと私でじゃんけんをしたら、後出しがなおって同時にじゃんけんができていた。子どもか

らも「ずるい」の声がなくなった。学童生活を家庭が受容し、改善に取り組んだことのよい結果だと思う。

・編み物教室は地域の人が二人来て教えてくれるが、そこに学童児の祖母も入って教えてくれた。このような活動を見ると、編み物の先生、学童児の保護者などという枠を超えている関係が生れている姿を見る。

③元八王子東小学校と地域との繋がり

・校長先生はよく動く校長先生という評判の先生で、八王子市社会福祉協議会のドッジボール大会に応援に来てくれた。子どもたちの力になったと思う。

・将棋教室は、地域の人２～３人で子どもたちに将棋を教えてくれる。子どもたちは将棋教室がない日常でも将棋をだして、対局している。クリスマス会には将棋教室の地域の指導員も子どもたちの演目を見に来てくれた。

・学童で行うキッズカフェは、学童児を迎えに来る保護者に子どもが当番制でカフェの店員になりサービスをする。文字通りキッズカフェである。
メニューによっては調理することも手伝う。このキッズカフェを学校と卒所生にも呼びかけている。小学校の管理職教職員、地域の放課後支援員（東っこ）が来て和やかに集う場所は、学童を超えた地域のたまり場のようであり、温かい関係がみられる。指導員Ｉさんは茶道をならっていると言う。キッズカフェでお願いすると快く引き受けてくれて、親御さんや教職員から抹茶が人気である。

・ハロウィンは学童から外へ出る活動である。地域の商店に協力をお願いする。飴を置かせてもらい、子どもたちがもらう。ラーメン屋さん、中華料理店、バイク店、クリーニング店、美容院など８店が快く引き受けてくれた。昔と違い、現代は地域の眼が希薄である。このような活動を通して、子どもたちを知ってもらうことは見守る眼ができ、安心がもてる。そして、職員も学童児もハロウィンの恰好をして歩くので、人目を引く。バスの中や車から手を振る人もいて、それに応えて手を振って、僕たち私たちヒーロー気分を味わった日であった。

・親子ドッジボール大会では、始まる前に創価大学の学生が沖縄舞踊を披露してくれた。

・児童館のイベント「おばけやしき」に学童児が参加した。

・放課後、校庭では１年から６年まで利用するので「東っこ」というボランティアの支援員がいる。支援員の方々が学童児も一緒に見守っていてくれて、広い校庭で遊ぶ子たちの安全確保になっている。また、「東っこ」所有の一輪車など遊具を学童児に貸してくれて、一輪車の椅子の調整などもしてもらい、つながりの大切さを思っている。

・PTA の学校美化活動に学童が参加したり、学校の参観日や文化祭には学童の職員が参観したりしている。働いている親なので見に来られない親もいると思うのと、教室での学童児を見たいので私も見に行くが私の姿を見ると、子どもは手を振ったり、ピースしたり、何回も振り返ったり、席を立って担任の先生に知らせに行く子もいる。そ

んな中で、私が見ているのを知らない顔をしている子がいる。学童に来て会うなり「なんで来たの」という。私が自信たっぷりに「学童のお母さんだから」というと、納得した顔をする。このような時に、学童家族だと思う。伝承遊びで、独楽台を貸出した、それを使っての授業で生徒がしているのを見るのは、役立って嬉しい気持ちだ。

・学校に園芸のボランティア活動をしている人と作業中に話をした。玄関にはいつも花が咲いている「きれいですね」と声をかけると校庭の奥に野草園というスペースがあるがそこに花を植えたいことを学校に話すと、会議を開いてくれて了承をえたということだった。その野草園で、夏休みにBさんと一緒に、1本ずつ植物を採り図画帳に貼り、植物図鑑で名前を調べてBさんが記入した。それを見ていた子が「ぼくもやりたい」と言いに来た。完成した「元八王子東小学校野草園」は、本棚の1冊の所蔵資料になっている。その資料を見る多くの子どもがいた。学校教育で野草園の桑の葉で蚕を育てたり、実などで色水を作ったりしていた。

子どもを真ん中にした信頼関係は可能性が広がる。双方向の関係が生まれるゆるやかな温かい関係である。子どもたちにとって、大人がつながることが、生活をより安全により豊かに楽しくするようになると考える。一斉活動と指導員との交流が深くなる個別やグループ活動も成立できる環境が学童児にとって必要なことである。元八王子東学童は、地域の子供会の役割も担っているのではないかと思うほど、活動が豊富である。「親密な人から認められることと学習意欲には関連があるとされている。ほめること、やる気、達成感は、学習に良い影響を与えるのではないか」と水野敬・理化学研究所分子イメージング科学研究センターが言う（読売新聞2010年6月10日）。

Ⅲ　読書についての考察

1、学習指導と学校図書館の講義の最初に「私のメディア史」を書いてもらう。
以下、学生の書いた「私のメディア史」を紹介する。

S君：私が最初に熱中していたメディアは本だったらしい。親に昔聞いたことによると、よく絵本やなぞなぞの本を読んでいたらしい。また、親に読んでもらうことも多く、幼児の頃はよく読んでくれと、また逆に読むのを聞かせたらしい。現在も本が好きというのは、そこから続いているものなのかもしれない。
また、私の家には、比較的早い段階でパソコンがあり、また触っていた。具体的には小学校1年生の頃から触っていた。小学校4年生頃には、親よりもパソコンが詳しくなり、電子メディアには強い子供だったと思う。逆に他の子どもと比べテレビは見ない。音楽は聞かない子供で、それは今も続いている。

Tさん：私の家には本（絵本・小説）がたくさんあり、小さいころから本と触れ合う機

会が多かった。寝る前は、必ず絵本を読んでもらい、読んでくれないと泣きじゃくっていたという話を聞いたことがある。休みの日は、公共図書館に行き、係の人が紙芝居を読むのをとても楽しみにしていたことを覚えている。現在もよく本は読むが、やはり、インターネットを用いての情報収集が多くなったように感じる。身近に様々なメディアが溢れるようになり、便利性を重視してしまいがちだが、新聞などのメディアも大切にしなければいけないと考える。

O君：私は小学校・中学年までは、体を動かすことが好きで、本などはほとんど見ず、唯一見るメディアが、TVでした。そのTVも食事のときしか見なかったです。小学4年生の時に学校図書館に授業で行った際、ファンタジーの本を読んだのですが、そこで本の面白さにはまりました。活字が与えてくれる興奮やその本の中に入り込む想像力など、私にメディアが与えてくれる情報の楽しさに変えられた瞬間だったと思います。

Sさん：幼いころから家にたくさんの本があり、絵本や図鑑などたくさん読んでいました。親もたくさん読み聞かせをしてくれたので、本は今でも大好きです。テレビもよく見ていて、ピーターパンのビデオが好きでよく観ていたと親から聞かされていました。小学校のころから小説で、字の細かい本も読むようになりました。高学年のころからパソコンでメールをするようになり、パソコンをすることがとても多くなりました。昔から朝のテレビはニュースを見るというのが私の家の決まりだったので、毎朝ニュースを見ていました。高校生から携帯電話も使うようになったので、情報を得るものはテレビ・パソコン・携帯電話、そして毎月買っていた雑誌などでした。

Y君：小さいころは、本を読むというよりは、外で遊ぶことが好きだったので、おそらく自分で一番初めに触れたメディアは、テレビ（視聴覚メディア）だと思います。特に「アンパンマン」が好きだったという事は覚えています。その後もあまり本は読まず、小学校1年生の時に、パソコンが家に来て、電子メディアに触れるようになったと思います。本を読み始めたのは、中学校入学してからが本格的で、小学校と違って学校図書館にある本が物語からSF的なものや小説というものが増え、それが面白かったから本に興味を持ち始めました。図書館を本格的に利用し始めたのは大学に入ってからで、課題の本を借りるために市内の色々な図書館と連絡を取るようになりました。

現代に生きる若者はちょうどメディアの変遷を体験してきた人たちである。電子メディアから活字本に入る人、活字本から電子メディアに入る人と様々であるが、言語力をつけるには、親や専門職の人などの手渡す人が介在し、また、家庭や図書館での本のある環境が整っていることが読み取れるのである。

2、学童にいる子供たちは親が仕事をしている子供たちである。お迎えに来る母親と話

をしても、帰宅して夕食食べて、お風呂に入ったら夜の9時や10時であると言う。迎えに来た親は遊びに夢中の子どもたちに「早く、早く」の掛け声になる。仕事から帰宅し疲労し、さらに読み聞かせることは困難なことが容易に想像できる。
朝日新聞　2014年10月16日の声欄から引用する。

温かい家庭を築ける環境整えて
主婦　長谷場　史子（埼玉県　32）

今年の3月まで子どもを保育園に預けフルタイムで働いていました。体力的にも精神的にも過酷な日々でした。主人は仕事が忙しく疲れはてて帰ってきて家事を手伝うことが限られます。私は家事と育児と仕事をキリキリしながらこなす毎日でした。娘が5歳になった今、専業主婦として家庭を支える母親の役割をひしひしと感じます。今までの私はイライラして家族の癒しの場である家庭をないがしろにしてきたのではないか、と感じました。

フルタイムで働いていると自分の時間はありません。帰宅後、夕飯の準備、かたづけ、お風呂、寝かしつけ、翌日のお弁当…。子どもを寝かしつけながら自分も寝てしまう毎日でした。娘には「早く早く」と食事や支度をせかす毎日、ニコニコする余裕もありませんでした。

共働きや夫婦別姓に否定的な発言をした女性閣僚がいます。「家族機能が破綻する」とは言い過ぎかもしれませんが、否定はできないと私は思います。働く女性が増えている今、大事なのは、女性が働いていても温かい家庭を築けるように環境を整えることだと思います。

『子どもの貧困』阿部彩から引用する。

…親が子どもを育てる環境も、家庭の経済によって、大きく左右されていることを示すデータがある。松本伊智朗札幌学院大学教授らは小学校二年生、五年生、中学二年生の子どもをもつ親を対象として、子育てと所得の関係の調査を行っている（サンプル数1023、調査年2001年）。…

「休日に子どもと十分に遊んでいる」と答えた親の比率は、年収1000万円以上の親では38.7%、年収200万円以下の親では26.8%である。「子どものことでの相談相手が家族の中にいない」とした親は年収200万円以下では19.7%であるのに対し、年収700万円以上では4.7%、1000万円以上では0%である。「病気や事故などの際、子どもの面倒を見てくれる人がいない」とする親も、年収200万円以下だと16.7%、1000万円以上だと9.4%である（松本2007）。

…すべての親は一生懸命に「温かい家庭」を築こうとするのであろうが、親の年収によって、子育ての環境は大きく異なっているのである。相談相手もいない、いざという時に支援してくれる人もいない、休日もゆっくりと子どもと過ごせな

い、という状況であれば「温かな家庭」で「のびのび」と子どもが育つことが困難になってくる。もちろん、すべての低所得の家庭がそうであるわけでもないし、これはあくまでも「確率」の話であるが、低所得の世帯に子育てに困難をかかえる親が偏っていることは疑いの余地がない。

育児中の親が子育て環境の中からでた叫び声である。子どもが学校から家庭に帰宅するまでの時間を過ごす場である学童で、子育て支援である読書環境整備・手渡す人がいることが重要な支援である。

学童での読書と読書環境について記す。

2014年4月から学童に勤務して、環境整備と手渡すことを通して、子供たちの変容と現場の変化を考えたい。

①おはなし会

☆2014年10月のおはなし会　午後3時15分から3時40分

プログラム

たぬきのおつきみ	絵本	岩崎書店
トンボのトンちゃんかくれんぼ	紙芝居	童心社
ウラパン・オコサ	絵本	童心社
♪やきいもグーチーパー		
わごむはどのくらいのびるかしら？	大型絵本	ほるぷ出版

季節感のあるものと、掛け合いのある『ウラパン・オコサ』が特徴である。

紙芝居『トンボのトンちゃんかくれんぼ』を語った。紙芝居のやり方の本物を見せてあげたいと思い、舞台と拍子木を持参した。雰囲気がでてよかった。子どもたちが遊ぶ時に、かくれんぼするのを見るので、トンちゃんがオニになり探すのは共感するのだろう、静かに画面に集中してきいていた。『ウラパン・オコサ』は掛け合うということが成立するか不安であったが、やってみると、すごい迫力で、オコサ・ウラパンなどと、掛け合った。聞き手の児童数は59人である。この一体感は、読み手も聞き手も絵本の世界に魅せられ、魔法にかかったように集中する。両者が読み聞かせの素晴らしさを体感する。この雰囲気をくずさないように、手遊び歌やきいもグーチーパーを、歌いながら手遊びをした。最後に近くにいる子と、じゃんけんをしたりしていた。このあたりになると、資料という媒体で、心と心が繋がっている楽しさを味わう。「次は、、、」と声を少し大きくしておもむろに袋から『わごむはどのくらいのびるかしら？』を取り出し、白板に寄りかからせて、絵をよく見せるように、ゆっくり読んだ。輪ゴムが伸びるのを想像するのか「ウェー」という子がいた。最後の方で、「バンとなるぞ～～～～」と、一人言う子がいた。空想の世界に翼を広げて、飛んでいる感じである。豊かな感性を育む時間である。

最後まで全員集中して聞いていた。耳を澄まして聴く力がついている。肉声でおはなしを楽しみ想像する世界へと、おはなし会は誘う。

おやつ前の時間設定であるが、子どもたちが一番好きなおやつの時間を目の前にして、よく聞いてくれている。4月から始めたおはなし会であるが、定着してきたと実感できた。4月に読んだ絵本『うんちっち』は、子どもたちが爆笑になった。7か月後になっても私を見ると「うんちっち」という子がいる。おはなしの世界の魅力、言葉の持つ楽しさを子どもたちの姿を通して感じている。

☆11月のおはなし会の手遊び歌で、♪いとまきをした。その後、遊びの時に、グループで毛糸のポンポン作りをした。厚紙に毛糸を巻いている時に、自然に一人の男の子が、「い～と～まきまき、い～と～まきまき、」と歌いだしながら、手を動かして毛糸を巻きだしたのである。近くにいた子たちも歌いだした。リズムある言葉は、心の奥深くまで届き楽しく口から躍り出てくるのだと思った。私は思いがけなかったので、言葉の楽しさがお互いの響き合う交流に発展することを見て、言葉を伝えることの意義を体験し感銘した。そして、子どもたちは繰り返しが好きだ。

☆2015年2月のおはなし会　午後3時45分から4時15分

プログラム

ぽちぽちいこか	絵本	偕成社
つるのおんがえし	紙芝居	教育画劇
♪いわしのひらき	手遊び歌	
お化けの冬ごもり		BL出版

4月から始めて11か月経った。防災の日や防犯のときには創作紙芝居『はるこちゃん、だまされないで』を演じたので、16回目のおはなし会である。『ぽちぽちいこか』は、半分を紙で隠しながらするアニマシオン（ゲーム感覚で読書して読みを深める）の手法で行った。挿絵を隠した紙をはずすと、子どもたちは笑い出した。言葉が方言なので、そのことも楽しかったのだろう。『つるのおんがえし』は、静かに物語の内容に聞き入っていた。物語の登場人物を通して、おじいさん、おばあさん、つる、殿様の関係を理解しながら広がる物語の世界を想像しながら楽しんでいる。静かな雰囲気で終わり、次に、手遊び歌の♪いわしのひらき、です。♪ずんずんちゃちゃ、ずんずんちゃちゃホッ！がリズムが弾み楽しくて、みな笑いながらしていた。子どもたちを見渡すと、決めポーズがとても上手である。二人前に出てきて一緒にしてもらった。最後は、『お化けの冬ごもり』である。子どもたちが好きなお化けである。雪入道には「すげえ、大きいんだ」の声。

おはなし会が学童の行事として定着し習慣になった。廊下の壁に「おはなし会」のポ

スターを貼ると子どもたちが、「今日、おはなし会」と聞いてくる。子どもたちの反応をみて楽しみにしているのが伝わってくる。

集中しておはなしを聞くことは聞く力をつけている。授業にもよい影響を与えると考える。今では、落語絵本や宮沢賢治の紙芝居など、1タイトルが15分かかる作品も語っている。おはなし会が終わると自発して、紙芝居の舞台などの片づけを手伝ってくれる子がいる。多動性の障碍を持つC君は、おやつの時間もじっとしていられないのだが、おはなし会のときは、ちゃんと座って聞いている。手遊び歌も好きだ。おはなしが紡ぐ関係は、心と心が通い合う。3年生の女子で、自分が読み手になりたいと言ってくる子もいる。

「読み聞かせ交流広場」（大学生が主で、地域の読み聞かせ活動）で、大東文化大学のF君は、とても落語を語るのが上手だ。板橋区立高島平図書館でのおはなし会では、子どもを連れているお母さんもF君の落語を楽しみにしている。F君に「上手ねえ」と言ったら、落語のCDを何回も聞いているとのことだった。読み聞かせをしている学生に、読み聞かせ活動をどうして続けているのか、活動のいいところは何かと聞いた。H君（活動歴7年）は「自分の選んだ本を子どもに読めるのがいい」、K君（活動歴10年）は「子どもたちが楽しそうにしてくれると自分も楽しくなる」、F君（活動歴2年）は「自分は読書が楽しくて、そのことが小さい子たちにも伝えられたらと思ってしている」と、読み聞かせ活動の意味を見つけて、この活動が自信になり、意欲を持ち毎回選書をして語るのだ。地域の子どもたちへ読書環境の貢献活動である。読み手を経験をしたい子、語る楽しさを知った人たちを今後も育て一緒に楽しさを共有していき、つながりができるといいと考えている。

②環境整備

本は、本棚と低ロッカーの上に置いてある。4月に指導員から、「子どもたちは本を読まない。手にとってもすぐ置いちゃう」と聞いた。本棚を見ると古い本が多い。477冊ある。この本棚の本を少しでも変えることができないだろうかと思った。新古書店で本を購入することができるかどうかを尋ねた。了解をえた。新しい本を置く場所を決め、新しい本のところへ置いた。指導員の寄贈本もある。子どもたちは、すぐ、気がつく、恐竜やお化けの本は人気だ。本を真ん中にして2・3人で読んでいる子、集中して読んでいる子などの姿を見ると、環境整備の重要性を思う。初年度なので、予算に限りがあるが、購入できて、新しい本コーナーができたことはよかった。小学校の中にある学童である。読書環境を考えるとき小学校の図書館、そして八王子市の読書はどうなっているのであろうかと思った。

Ⅳ　元八王子東小学校と八王子市

2014年11月21日に学校長の許可をいただき、学校図書館を昼休み（13：15～13：35）に見学した。常駐する人（司書）のいない図書館は事前に知っていたが、やはり日本の学校図書館の現状を目の当たりにした。

図書館開放は、中休みと昼休みで、月・火・木・金曜日に読書と本の貸出しをしている。

図書委員3人が入ってきた、受話器をとって、「図書委員会からお知らせです。今、図書館が利用できます。本を読んだり借りたりできます。ぜひ、図書館に来てください。」と、校内放送をした。学童にも聞こえる放送である。

学校図書館の機能をだすには、常駐する専門職・豊かな資料・教室の身近にある施設が重要である。読書センター、情報センターと言われているが、機能を果たすには、大きな課題がある。生徒が主体になる学び、読みたい本を読める学校図書館に財源が必要である。ボランティアの方が整備したサインは、可愛くて目をひいた。

国際化はどんどん進んでいる。逆戻りすることはないだろう。そして、IT化・情報化で、国境もなくなっている。一国の問題が他国にも瞬時に影響が及ぶ現代である。そして、生涯学習といわれて久しい。指導要領も改訂される。より一層、自分の頭で考える人間が求められる。

平成24年文部科学省「学校図書館の現状に関する調査」によると、学校司書配置状況は小学校と中学校は全国平均50％足らずである。

子どもの成長は待ってはくれない。八王子市の読書と学校図書館の現状を記す。

第2次　読書のまち八王子市推進計画（平成22年～26年度）で、学校図書館と学童について関係するところを抜粋する。

第2章　具体的な取組

⑥児童館などでの読書活動

ア　児童や学童クラブでの読み聞かせやおはなし会などの活動が充実するよう支援を行う

⑦おはなし会等のボランティア組織への積極的な参加

ア　おはなし会などで協働しているボランティア組織への積極的な参加を呼びかける

⑧学校図書館読書指導員への登録の呼びかけ

ア　児童・生徒の読書活動に重要な役割を担っている学校図書館読書指導員へ

の登録を呼びかける

2．学校における読書活動推進に向けた取組

現状

小・中学校の図書館は、上層階にあるところが多く利便性が良いとはいえない状況にある。また、一定規模以上学級数を有する学校には司書教諭は配置されているものの、学校図書館に携わる時間は十分とは言えず、各学校図書館の相互の連携、蔵書のデータベース化（所蔵資料の登録）等はこれからであり、その機能が十分活用されているとはいえない状況である。一方、学校図書館読書指導員は460人（平成20年度）登録され、読み聞かせ・図書の配架・整架等を行い、ますます重要な役割を担っている。

八王子市の「読書のまち八王子市」というスローガンがあることは、現場の人間が動いていく時にやりやすくなる。具体的に読書・学校図書館・地域図書館などと横のつながりをしようと動くときにつながりやすくなる。元八王子東小学校で図書ボランティアの人から話を聞いた。

2014年11月27日に、元八王子東小学校の図書ボランティアの人がしているおはなし会を聞きに行った。毎週木曜日の中休み（10時20分から40分まで）の時間に第2図書室（1階にある）で行っている。質問にとても誠実に応えていただき、詳しく知ることができた。

図書ボランティアは7名の人がいるが、仕事している人もいる。一回に二人いればできる。本は図書館で借りてきている。絵本の時もあるし、紙芝居の時もある。1年生から6年生に呼びかけるが、低学年が多い。

読み聞かせのタイトルは、『うみのみずはなぜからい』（絵本）だ。次々に子どもたちが入ってきて、37名の参加者である。校長先生と教員一人が聞きにきていた。最後に、ボランティアの人が作ってきた栞をほしい生徒に配っていた。終了後、さっと、子どもたちは次の授業へと教室にもどった。

ボランティアの方々は元八王子東小学校の4人の保護者の方たちで、一人は卒業生の親でした。10年以上続いている。私が「学童で、おはなし会をしていますが、聞く態度ができているので、(図書ボランティアの）おはなし会の影響が大きいと思う」と言った。ボランティアの方が「子どもによってで、騒がしくてなるときもある」とのことであった。これは、公共図書館のように、おはなしを聞きに来ている目的でいる子どもたちに語るのと違うことである。また、それぞれの子どもの読書経験が違い、学校教育だけではなく、家庭教育にも読書経験が影響され、乳幼児期の読書がどう経験されてきたかが大きい。そうだからといって、そのままにしておくのではなく、気がついた大人が目の前にいる子どもたちに読書の経験をさせていくしかないと思う。その意味でも、ボ

ランティアの方々のおはなし会は意義深い。話しを聞いていて、図書ボランティアの会のありかたがゆるやかであるように思い、10年以上継続してきた理由がそこにあるように感じた。八王子市の学校図書館の現状を考えるとき、このような活動が読書に重要である。現在、図書ボランティア活動はおはなしをしていることが主で、学校図書館のボランティアは終わっているとのことだった。本を分類に分けて、サインを作ったとのことでした。

1年生の授業参観したときに学童児が一輪車に乗ったり、創作紙芝居を語っていた。

創作紙芝居は二人でしていたが、一人は言葉に障碍があるDさんであった。保育園からの申し送り書類がある。Dさんは学童で私の側に来て、折り紙したり絵を描いたり、コップなどの食器をふくのを手伝ってくれたりして、よく気がつく我慢強い子だ。Dさんが終わった後に皆の前でJ先生からほめられているのを見た。温かい教室づくりにほっとするとともに、読書に対するかかわりを知ることができ、よい授業を参観することができた。

まとめ

「スマホに一生懸命で、家族の会話がない」と、知人が言う。LINEについて、中学生がテレビインタヴューされて「悪口が簡単に言える。自分も言われているんじゃないかと不安になる」と聞いた。人間関係が信頼関係を築けずに、交流する言葉が変質しているのだ。朝日新聞の2014年3月6日の「中高生が語るLINE生活」の記事の中から引用する。『多くの生徒は、相手がメッセージを読んだ「既読無視」のつらさを訴えた。既読の印をオンやオフにする機能をつければ、いじめなどの問題がなくなるとの提案もあった。』

2013年に八王子市片倉在住の91歳の女性と話をした。6人兄弟の上から2番目だ。小学校から帰宅したら畑仕事を手つだい弟や妹の世話をして、お風呂に水を入れ、食事の支度をする。食事は飼っていた鶏の卵とぬかずけとご飯だと言っていた。父親がお祭りに連れて行ってくれるのが一番の楽しみであったという。父親からほめられるのが一番嬉しかった、とのことだった。そこには、子どもが生活者の一員であり、親の家事労働を助ける担い手であり、生活のなかでの交流があり家庭の深い関係がある。1世紀前と比べると機械化され便利になった現代であるが、生活が大きく変わり、それによってコミュニケーションする言葉も変わったのだ。

全国学童保育連絡協議会の資料から引用する。

政府の新しい政策「子ども・子育てビジョン」(2010年1月29日　閣議決定)

学童保育の利用児童を5年間で30万人増やす、から抜粋し記す。

□放課後児童クラブの充実

・就労希望者の潜在的なニーズに対応し、放課後児童クラブを利用したい人が必要なサービスを受けられるよう、受け入れ児童数の拡充を図ります。対象児童（小学校1～3年）のうち、放課後児童クラブを利用する者の割合については、潜在的需要を合わせると、平成29年度には40%に達すると見込まれていますが、平成26年度までに32%のサービス提供割合を目指します。また、放課後児童クラブを生活の場としている子どもの健全育成を図るため、「放課後児童クラブガイドライン」を踏まえ、放課後児童クラブの質の向上を図ります。

学童は異年齢の子どもたちが共同生活をする所であり、学童と地域とつなげる重要な施設なのである。安心できる学童は、職員の専門的知識や実践が必要不可欠である。今後、専門職の蓄積が研究され蓄積が保障されることが必要である。行事をこなせていけていることは、職員間の協力体制ができていることなのである。運営概念の確立、時間、協力体制、財政、職員の専門性、教育と福祉の太いパイプが子育て支援の強い力となる。子どもたちの学童が居場所となることが、働く親の支援となり、日本の未来を担う子たちが明るくなる。

2014年11月23日の朝日新聞「学習指導要領　21世紀の学力育つか」の記事から引用する。

目指すのは、教わったことを多く覚え、早く答えを出す力ではない。自ら考え、問を見つけ、対話しながら新しい価値を生み出す「21世紀の学力」だ。肝心なのは、目の前の子どもの実態を踏まえ、実際の教室の授業をどう改革するかである。改訂では、黒板とチョークによる一斉授業を変え、子どもが討論や体験を通じて自ら学ぶ「アクティブ・ラーニング」を充実させる。だが、100万人もの教員が自ら経験したことのない手法で授業するのは簡単ではない。国際調査の結果を見ると、道は険しい。日本は、子どもが少人数グループで解決策を考え出す授業をしている割合が最低レベルだ。学習の動機づけや批判的な思考を促すことに自信をもつ割合も、圧倒的に低い。

21世紀の学力は言語力がより重要になってくる、親の環境に影響を受けずに、どの子にも言語力を身に付けさせることに、学童生活の読書への取り組みは重要である。元八王子東学童事業所の事例であるが、学校・地域とつながり、それを行政が支援することが大切である。ますますの発展を願う。学校教育・福祉とつながり、地域力で子どもたちの生きる力を育むことが求められている。

日本の社会政策には、「子どもの貧困」に対する施策がほとんど欠落しており、また、教育政策においても、他国に比べると最低レベルの支出に抑えられている。日本の公的教育制度は、公的な負担よりも、私的な負担によるところが大きく、さらに、公立高校や公立大学など比較的に経済的負担が軽い学校に進学したり、奨学金を取れるような学力をみにつけるためには、それなりの公教育外の投資(塾など）を必要とする、という二つの経済的ハードルが存在する。子どもの貧困率が1990年代以降上昇しつつあり、経済的な困難を抱える親が多くなってきたいま、このような制度設計による日本の教育システムは、「子どもの貧困」に対処できなくなってきている。貧困の子どもにとって二つの経済的ハードルは、もはや乗り越えられない高さになっており、意識の変容までをも促しているのである。

（『子どもの貧困』阿部彩）

学童においての読書について考えてきたが、子どもの置かれた環境に言及しなければ解決されないのである。教育基本法第7条（社会教育）①家庭教育及び勤労の場所その他社会において行われる教育は、国及び地方公共団体によって奨励されなければならない。②国及び地方公共団体は、図書館、博物館、公民館等の施設の設置、学校の施設の利用その他適当な方法によって教育の目的の実現に努めなければならない。と書かれている。

校庭で学童児を見守っていると、校長先生や教員、学童の指導員と子どもたちがサッカーしている姿を見る。地域の中にある学校である。学童児は学校の子どもであり、また地域の子どもであると思う。子どもの成長を考えるには地域で育てるつながりを欠かすことはできない。

〈参考文献〉

いま、教育基本法を読む～歴史・争点・再発見～　堀尾輝久・著　岩波書店　2005年
保育内容シリーズ　言葉　谷田貝公昭（監）・速水博司（編）　一藝社　2006年
福祉サービスの組織と経営～新・社会福祉士養成講座～　中央法規　2011年
福祉行財政と福祉計画～新・社会福祉士養成講座～　中央法規　2013年
児童や家庭に対する支援と子ども家庭福祉制度　ミネルヴァ書房　2014年
～MINERVA社会福祉士養成テキストブック～　柴野松次郎・高橋重宏・松原康夫・編著
子どもの貧困～日本の不公平を考える～　阿部彩・著　岩波新書　2011年

（2015年3月20日受理）